

【様式】

平成28年度 学校マネジメントシート

学校名（ 川越高等学校 ）

1 目指す姿

(1) 目指す学校像		○ 我が校は、広い国際的な視野と自主的創造的な精神を身につけた「自立した学習者」(Independent Learner)を育成し、地域から信頼される進学校としての役割を果たします。
(2)	育みたい 児童生徒像	○ 利他の心を持ち、行動する心構えと力をもつ、たくましい生徒
	ありたい 教職員像	○ 「文武両道」の活力ある進学校としての実績をさらに向上させ、地域の期待に応えることのできる教職員集団 ○ 個人の資質向上に努めるとともに、組織としての指導力が着実に向上し続ける教職員集団

2 現状認識

(1) 学校の価値を提供する相手とそこからの要求・期待	＜生徒＞ ほぼすべての生徒が、大学進学を志すとともに、部活動等の様々な活動にもチャレンジし、充実した高校生活を過ごしたいという気持ちを持っている。 ＜保護者＞ 生徒の進路として大学、特に国公立大学への進学を希望している。生徒の生活面の指導徹底を望む声も強い。 ＜地域＞ 英語を武器にできるグローバル人材の育成を期待されるとともに、英語教育の先進的な取組の情報発信を求められている。	
(2) 連携する相手と連携するうえでの要望・期待	連携する相手からの要望・期待	連携する相手への要望・期待
	＜家庭＞ 大学進学に向けた指導を充実させる一方、将来をたくましく生きる力をつけた生徒の育成を図ること ＜中学校＞ 川越高校を志望する生徒に対しての情報提供が十分であること ＜地域・大学＞ グローバルマインドをもって地域社会を支える人材を育成すること	＜家庭＞ 家庭での学習習慣や、基本的な生活習慣を家庭でつけること ＜中学校＞ 川越高校への進学を希望する中学生の要望を学校に伝えること 川越高校の教育方針を踏まえた進路指導を進めること ＜地域・大学＞ 外部指導者として高校の授業、特別活動等を支援すること

(3) 前年度の学校
関係者評価等

学校自己評価において特に評価できる点

1. 主体的・創造的な行動

- ・総合的な学習の時間を活用したキャリア教育プログラムが各分掌で企画されている。人権教育、進路ガイダンス、大学研究、モチベーションアップの講演会等が実施され、教育効果を上げている。
- ・家庭学習時間の確保のための課題設定がされている。教科の学習指導体制がしっかりしているといえる。授業外学習が定着していることは、今後、アクティブ・ラーニング型授業をさらに展開していく上で、反転学習などのリソースとなる。
- ・クラブ活動の加入率90%超は、主体的創造的な教育活動として評価できる。

2. 授業改善の取組

- ・公開AL研修会を年4回、授業研究協議会2回実施。一過性ではない、計画的なAL研修を実施していることは括目に値する。AL実践研究推進の地域の拠点としての役割を十二分に果たしたと考えられる。外部のAL研修にも11名の参加者があり、ミドルリーダーの育成が図られている。
- ・AL型授業の実施について全校集会等で生徒に地道に情報共有が図られているのも評価すべきである。

3. 英語教育の実践

- ・国際文理学科の取組は「グローバル人材の育成」の要として評価できる。この取組を国際文理学科だけのものにしておくのは惜しい。公開授業、海外スタディツアーなど、独自性を発揮している。

4. 主体的行動力の育成

- ・携帯電話の校内使用不可については保護者からの賛同もあり、生徒にもマナーとして定着している。携帯依存症の問題は教育現場からも看過できない。思考力、判断力、表現力を培ううえで「オフライン」の状況を確保することは重要である。

5. 学校経営の改善

- ・学校全体として協働的な授業改善運動を評価したい。地道な改善運動が長期的に見ても教師ひとりひとりの力量を伸ばし、ひいては学校全体の教育力の向上になる。

学校関係者評価委員からの提言

- ①学習指導を丁寧に行えば行うほど生徒の主体的、能動的な学習姿勢が損なわれはしないかという危惧がある。学習指導の段階的な見通しを立てて指導していくプロセスを教師が意識することによって、結果的に自立した学習者として育てていくことが肝要である。
- ②AL型授業については、すでに多くのリソースを得られている。そのリソースを、今後生かしていく校内のプロジェクト組織が必要であると考えられる。校内全体の流れづくり、共通理解を図っていく上で日常的に活動できる体制を整えたい。もう一つの課題として、AL型授業の必要性を保護者に共有するということがある。一歩踏み込んで、家庭と学校が協働して、ALのテーマ、知識基盤社会を生きていくこれからの生徒にとってどのような関わりが、生徒の課題を発見する力や主体性、協働性を育むことになるのか、問題提起していく必要があるのではないか。
- ③国際文理学科は「グローバル人材の育成」の要として評価できる。この取組を国際文理学科だけのものにしておくのは惜しい。グローバル社会に対応できる教育は国際文理学科の生徒だけの課題ではない。これも多くのリソースがあるので、普通科の生徒にもさらに共有する仕組みを考えたい。

(4) 現状と課題	教育活動	・生徒には、学習に熱心に取り組む姿が見られるが、まだまだ受動的な姿勢が強い。自ら学習に向かう意識づけのための指導が必要である。3年間の教育活動全体を通じたキャリア教育の推進による学習への外発的動機づけを図るとともに、授業のあり方の研究を進め、生徒が主体性を持って他者と協力して問題を発見し解を見いだしていく学びができるよう改善に取り組み、学習に対する内発的動機を喚起する必要がある。 ・個々の教員は、豊富な経験と各教科の指導法共有等により、指導力の向上に努めているが、一層の取り組みが必要である。高大接続改革を見据えながら、学校全体として、アクティブ・ラーニング型授業に取り組むという意識を持って、教科ごとに指導内容や指導方法などについての研究や共通理解を深め、授業満足度をさらに高める必要がある。 ・英語科から国際文理科への改編から3年が経過し、難関国公立大学理系学部に進学する卒業生も出るなど、当初の目標である、理系も含めて英語の能力や異文化への理解を高めた生徒の育成は、一定の成果を収めることができた。今後はさらに、躊躇せず交流する態度の育成や、文理の各分野への知的関心を喚起する機会の充実を図り、言語や文化が異なる人々と主体的に協働していくことのできる自立した社会人の育成を図る必要がある。 ・部活動は加入率が90%以上で、活発に活動している。生徒会などの自治活動も年々盛んになってきているが、生徒の自治能力や主体的な行動力、政治的教養の育成、ルール・マナー遵守の指導をさらに進める必要がある。
	学校運営等	・教職員は、生徒の進路希望の実現のための授業や面談、部活動の指導等に日々邁進しているが、多忙な日々の中で、生徒・保護者や地域社会のニーズの把握、分掌間の意思疎通が十分ではない面がある。

3 中長期的な重点目標

教育活動	・一人ひとりの生徒が、自分の将来をイメージし、主体的に学習活動や部活動に取り組み、夢の実現に向け着実に努力している。国公立大学現役合格者が100名を超えている。 ・生徒の状況にあった教科指導のあり方が確立されており、各教科の教育力と各教員の授業力が常に向上し続けており、すべての生徒の学力が向上している。 ・先進的な英語教育や国際理解教育が実践されており、継続的に教育内容や教育方法の研究がされている。
学校運営等	・教員同士の対話及び生徒や保護者との対話が活発に行われており、学校関係者評価委員会の提言等を活かして着実に学校経営が改善されている。

4 本年度の行動計画と評価

(1) 教育活動

教育活動に関する項目は、児童生徒を対象としたものとするのが望ましい。

(例)「教育課程・学習指導」「キャリア教育(進路指導)」「生徒指導」「保健管理」など
また、評価項目・指標等を検討する際の視点は、学校の実態に応じて設定する。

【活動指標について】取組・活動の具体的な活動量や活動実績を指標にします。

【成果指標について】取組・活動による具体的な効果や成果等を指標にします。

【備考欄について】「※」: 定期的に進捗を管理する取組 「◎」: 最重点取組

項目	取組内容・指標	結果	備考
キャリア教育 (進路指導)	3年間を見通したキャリア教育プログラムを検討することにより、現在実施している取組の成果と課題を明らかにする。 効果的な学習指導のあり方の検討を進める。 (1年生2時間以上、2年生3時間以上の生徒60%以上)	総合的な学習の時間の年間計画の見直しなどを進めたが、まだ十分に系統的効果的なものとはなっていない。一方で国公立大学合格者が124名となるなど、多くの生徒の進路希望を実現することができた。また、国際文理科設置の狙いでもある理系国公立大学合格者も60名に達するなど、教育課程改善の成果も見られた。 1年生2時間以上学習者: 平日 38.5%、休日 79.6% 2年生3時間以上学習者: 平日 10.4%、休日 66.6%	

改善課題

キャリア教育に係るほとんどのプログラムは、前年度実施の内容を基本に多少の改善を重ねながらほぼ固定的に行ってきたが、活動内容が増えるばかりで運用面での余裕がなくなっている。年度末には、総合的な学習の時間の年間計画の見直しを図ったが、それ以外の教育活動の系統性の確保にはまだまだ改善の余地があることから、次年度も、引き続き、3年間を見通したキャリア教育プログラムの研究を続ける必要がある。

項目	取組内容・指標	結果	備考
学校の教育力の向上	昨年度から取り組んでいるアクティブ・ラーニング型授業の研究を継続し、教員一人ひとりの授業力を向上させる。 生徒の状況にあった学習指導のあり方について各教科で検討を進める。	文部科学省事業の指定を受けて、学校全体がAL型授業の研究開発に取り組むことができた。 AL型授業に取り組んでいる教員84% AL型授業で、生徒の思考力・判断力を育成できたと考える教員96%	

改善課題

平成28年度から29年度の2年間、文部科学省事業「アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」の研究指定校となり、学校全体で、AL型授業の推進に向けて、研修や公開授業、研究協議会を進めることができた。今年度は全体での基礎的な研究であったが、次年度は、教科の特質を踏まえつつ、学習場面に応じた効果的なAL型授業の研究を進めるとともに、AL型授業の効果を高める新しい評価方法の研究に取り組む必要がある。

項目	取組内容・指標	結果	備考
英語教育	実用英語技能検定等の校外の英語能力認定検査の受検を進めるとともに、高大接続に係る英語指導のあり方について研究を進める。	国際文理科の海外スタディーツアーに係る教育活動の充実の他、県事業の指定を受けるなどして、英語教育の充実を図った。	

改善課題

三重県教育委員会事業「英語教育研究校」の指定を受けたこともあり、4技能の育成を重視した英語教育の推進を図ることができた。また、実用英語技能検定受検者も増加傾向を維持し、上級者の合格も増えつつある。今後は、生徒の深い思考を英語で表現し、対話できるような力の育成を図る必要がある。

(2) 学校運営等

学校運営等に関する項目は、教職員や施設等を対象としたものとするのが望ましい。

(例)「組織運営」「研修(資質向上の取組)」「情報提供」「保護者・地域住民等との連携」など
また、評価項目・指標等を検討する際の視点は、学校の実態に応じて設定する。

【活動指標について】取組・活動の具体的な活動量や活動実績を指標にします。

【成果指標について】取組・活動による具体的な効果や成果等を指標にします。

【備考欄について】「※」: 定期的に進捗を管理する取組 「◎」: 最重点取組

項目	取組内容・指標	結果	備考
組織運営	目指す学校像や生徒像を実現するための方策について教員相互の対話を促す。 業務の整理と効率化を図ることにより生徒の夢の実現を最大限支援できる組織を実現する。 生徒の代表と企画委員会のメンバーが意見交換できる機会を設定する。 校内各種委員会の精査と構成員の見直しを進める。 PTA常任委員会等を活用し、保護者の意見を吸い上げる。	年間を通した面談で校長と教職員の対話は進んだが、職員相互に自由に協議できるような場面を設定することはできなかった。 また、管理職と生徒会との意見交換は実施できたが、企画委員会との会合は設けることができなかった。 PTA 役員と教職員との対話は密接であり、様々な意見を交換することができた。	

改善課題

12月の学校関係者評価委員会で、学年分掌は教育活動充実に向けてそれぞれに努力しているが、組織全体としてのPDCAサイクルが円滑に廻っていないとの指摘をいただくなど、組織運営改善に大きな課題がある。次年度は、企画委員会の時間を増やし、学校運営について自由討議できるような時間を設けるなどして、組織全体の経営の系統化、

教育効果向上を図る必要がある。

5 学校関係者評価

明らかにった
改善課題と次へ
の取組方向

学校関係者評価委員からの提言

①学習指導、進路指導

教員は学年、教科で連携をとりながら、授業、補習、課外等の細やかな指導で熱心に学習指導を進め、生徒の学力を着実に伸ばしている。また進路指導部が中心となって一人ひとりの生徒の志望に応じた適切な指導が行われている。本年度は、国公立大学合格者数も飛躍的に伸びたが、3年間の指導を振り返って、この成功要因をしっかりと分析し、今後、組織的系統的な川越高校型学習指導、進路指導を確立することが求められる。

また、一方でA L型授業の推進の目的としている、主体的、対話的で、深い学びを実現する授業と、生徒・保護者の強い要望である国公立大学合格に向けた指導を、高いレベルで両立させるような学習指導、進路指導のあり方の研究を続けることが必要である。

②教職員の資質向上、授業改善

A L型授業に向けた授業改善は、昨年度よりも一層進み、学校全体の動きとなっている。実際の授業を参観しても、生徒は非常に主体的に授業に参加しているように見えるし、教員の実感としても、A L型授業に取り組んだ結果、思考力・判断力や協働性、主体性の育成に効果を感じている。次年度はさらに効果的なA L型授業のあり方について、研究実践を深化させることが望まれる。

また、A L型授業の推進に伴い、教育効果が明らかになってきた、電子黒板やタブレットパソコンの整備を早急に図る必要がある。

③国際文理科、英語教育の充実

先進的な英語教育、実践的な英語力育成システムは、川越高校の強みであり、これが現在の人気や進路実績を支えている。しかしながら、英語科を始めとする教員への負担加重や、海外スタディーツアーの改善検討などの課題もあることを認識し、教員の人的配置も含めて早急に対応する必要がある。

④組織運営

学校全体に教育活動を充実させようとする気風があり、個々の教員や各学年、分掌は非常に熱心に指導に取り組んでいる。特に若い教職員を育てる雰囲気や、それに応えて活躍する若手教員の意欲は非常に評価できる。

しかしながら、学年主体型、前年踏襲型の指導体系に陥っており、そもそもの取組の目的が十分に認識されていない教育活動や、効果の薄れている活動の継続も見受けられる。またそれが教職員の負担加重にもつながっており、川越高校3年間を貫く系統的で効果的な教育活動の構築が求められる。

この改善を進めるためには、組織活動のPDCAサイクルを円滑に回す必要があり、学校運営全体を見通して職員が協議できるような時間を意図して作る必要がある。また、マネジメントシートについてもより具体的な取組や、成果、課題を明示することにより、学校内の共通目的を明確にするツールとして活用することが望まれる。

6 次年度に向けた改善策

教育活動についての改善策	成果が現れつつあるA L型授業についてさらなる改善充実を図るとともに、教科の枠を超えて勉強会を実施するなどして情報共有を図る。 大学入試改革の動向を踏まえながら、本校におけるキャリア教育のあり方について再検討する。
学校運営についての改善策	教職員同士の対話の促進を図り、P D C Aサイクルを円滑に回すことにより、効率的な学校運営となるようなシステムを構築する。